

## サトイモスイーツ提案

### フロンティア

# 人びと

きな姿が、地域に元気をもたらしている。

（坂本智佳子）

水戸市の和菓子店「五條」。

食感が滑らかなプリンやくずもちなどの試作品が生み出され、商品化を待っている。「みんな、サトイモが入っているって気付かないの」と中西は笑みを

浮かべる。工場長の宮脇匠旨（44）も「サトイモってどんな菓子にも合うね。可能性を秘めた野菜だよ」と商品開発が楽しくてたまらない。

「脳響スイーツ」が、県内で続々と誕生している。あめやせんべい、パスタに豆腐など8店舗が取り組む。6月には笠間市の洋菓子店グリユイールが、

県内産ブルーベリーとサトイモのエキスを使った「脳響ゼリー」を生み出した。サトイモのエキスをゼリー全体の2割を占める。商品名には「脳響」の言葉を入れ、サトイモと農協（JA）をさりげなくPRする。

### 脳響パン完成

中西の仕事は、厚生連で予防医療に取り組むこと。なぜサトイモなのか。きっかけは、昨年

3月、高齢者向けの給食サービスの献立を考えていた時、「認知症を予防する食べ物って何だろう」と、インターネットで検索。すると「サトイモ」の文字が目に見え込んだ。「これだ」。

サトイモを買い込み、「誰も食べやすいように」と自宅の台所で加工品作りを始めた。週末は朝から晩までサトイモの皮をむき「手がかゆくて、眠れない日もあった」と振り返る。

も、げげんな顔をされた。訪ねた店舗は100店以上だった。事態が動いたのは4月。友人の紹介で知り合ったグリユイールオーナー、根本高行（55）が「サトイモ、面白いね」と食いついた。「ようや、分かってくれた。言い続けてよかった。店から店へサトイモのうわさが広がった。「うちもやってみたい」と声も上がり、地域は活気付いてきた。

### 作付け拡大も

中西の活躍が、サトイモ栽培にも変化をもたらした。「来年はサトイモの作付けを増やそうか」という声もある。JA生活福祉課課長、菅谷加代子の表情は明るい。機能性についても、茨城県工業センターに調査を依頼している。

パンやケーキ、クレープなど30種類ほど考案。レシピ集は1年でノット2冊分になった。材料費は100万円を超えた。JA茨城中央が、サトイモ50kgを調達し、中西を支えた。

今年3月、「脳響パン」が完成した。たった一人で近所の商店を訪ね、売り込んだ。「脳を活性化するんですよ」と勧めて

「サトイモは脳の活性化だけでなく、地域を元気にする」。全国どこに行っても、脳響スイーツが置いてあるのが目標。「中西の挑戦は続く。」（本文敬称略）

# 高齢者への思い形に



水戸市 中西 京子さん (53)

宮脇匠旨が作った「脳響スイーツ」を試食する中西京子さん（水戸市で）

農村には何もない、と魅力は絶対にある。そしてその魅力は、誰かが発信しなければ伝わらず、埋もれてしまう。信念を持って「これはいい、面白い」と言い続けること

### メッセージ

で、必ず相手に届く。一人ではなく、みんなを巻き込んで取り組めばアイデアがどんどん出てきて、地域が元気になる。まずは、発信することから始めてほしい。